平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

防衛医科大学校病院 放射線部 野瀬英雄

8 月 2 日から 9 日まで米国の Stanford 大学にて，Symposium on State-of-the-Art Imaging に参加した．この研修では，日米の医療制度および診療放射線技師の資格制度の違い，診療放射線技師の世界水準の把握，そして最先端の装置，世界的に著名な先生方の講義を通じてこれからの radiological imaging の方向性を知ることを目的としていた．

今回で 4 回目となる研修，事前に前参加者の報告書を拝見してある程度準備はしていた．参加して感じたことだが，やはり見るのと聞くのでは大変大きな違いがあると痛感した．先生方の自信に満ち溢れた講義，そして我々がこれからの放射線医学界，いや医学界全体を牽引していくんだという強い意志を感じた．これだけの確固たる自信，将来に対する信念は 20 年も前から非常に詳細かつ正確に research を行ってきた成果であって，データに基づいた将来への予測は非常に説得力があった．

どのようにすればこのような整った環境を構築することができるのか．それは米国の診療体制と文化に起因するのではないかと感じた．米国には日本のような医療に対する社会保障制度が存在しない．そして，最先端の医療を受けるためには高額な医療費を支払わなければならない．その医療費は技術の維持，最新設備の管理，優秀なスタッフの報酬へと費やされる．高額な診療報酬は世界中から優秀な人材を集め，その人たちによって，最新の装置が開発され，さらに優秀な人材と資金が流入する．これが米国の医療技術の推進力になっている．

研修を通して，日本の技師のレベルは世界的にみて比較的高いところにあると感じた．米国のように資格制度や徹底したマニュアル化を導入せずとも，高い医療水準を保っている日本の医療制度に感動した．しかし，実際日本では技師の技量によって検査の質が大きく異なっていることがある．また，スキルに見合った報酬を得られないのも問題である．現在ある認定制度を国家資格に引き上げる必要性を感じた．

今回の研修は Stanford 大学の社会貢献の一環であると考えている．私も Stanford 大学の姿勢を見習い，もらうばかりでなく与えられる立場になるよう今後一層努力し，研究や教育，日々の業務などで少しでも社会貢献できればと考えた．この Stanford 大学研修は，毎年回を重ねる度に前回の反省点を考慮してスタッフの方々が改善し，入念に準備して下さっている．前回の報告書の要望が今回のスケジュールにしっかりと反映されていたことに驚き，彼らの研修に対する思いに感謝し，この研修に参加できたことに喜びを感じた．これから参加される方に，この研修はあなたの視野を確実に広げ，今後の研究や業務に多大なる影響を与えるものとなることを約束する．これからの若い技師や研究者の方の参加を切に願う．

最後に本研修に際して多大な尽力いただいた Stanford 大学，日本放射線技術学会，GE Healthcare Japan の皆様に厚くお礼申し上げます．また，参加に快く送り出していただきました防衛医科大学校病院放射線部診療放射線技師諸兄に感謝します．

ME-MRI で著名な Sandip Biswal 先生（左）と筆者